

JP 2008-133459 A 2008.6.12

(19) 日本国特許庁(JP)

(12) 公開特許公報(A)

(11) 特許出願公開番号

特開2008-133459

(P2008-133459A)

(43) 公開日 平成20年6月12日(2008.6.12)

(51) Int. Cl.		F I	テーマコード (参考)
C08G 18/10	(2006.01)	C08G 18/10	4J005
C08G 65/26	(2006.01)	C08G 65/26	4J034
C09J 175/06	(2006.01)	C09J 175/06	4J040
C08G 18/42	(2006.01)	C08G 18/42	A

審査請求 未請求 請求項の数 5 O L (全 15 頁)

(21) 出願番号	特願2007-277804 (P2007-277804)	(71) 出願人	000000044
(22) 出願日	平成19年10月25日 (2007.10.25)		旭硝子株式会社
(31) 優先権主張番号	特願2006-292433 (P2006-292433)		東京都千代田区有楽町一丁目12番1号
(32) 優先日	平成18年10月27日 (2006.10.27)	(74) 代理人	100106909
(33) 優先権主張国	日本国 (JP)		弁理士 棚井 澄雄
		(74) 代理人	100064908
			弁理士 志賀 正武
		(74) 代理人	100094400
			弁理士 鈴木 三義
		(74) 代理人	100106057
			弁理士 柳井 則子
		(72) 発明者	松本 幸夫
			茨城県神栖市東和田25番地 旭硝子ウレタン株式会社内

最終頁に続く

(54) 【発明の名称】 一液湿気硬化性組成物

## (57) 【要約】

【課題】粘度が低く、接着性に優れるとともに、硬化物における破断強度および伸びが良好である一液湿気硬化性組成物化性組成物を提供する。

【解決手段】水酸基価10～300mg KOH/gのポリオール(A)とポリイソシアネート化合物(B)とを反応させて得られるイソシアネート基末端プレポリマーを硬化成分とする一液湿気硬化性組成物であって、ポリオール(A)が、開始剤(a)に対して、ポリカルボン酸無水物(b)およびアルキレンオキシド(c)を共重合して得られるポリエステルエーテルポリオール(A1)を含むことを特徴とする一液湿気硬化性組成物。

【選択図】なし

(9)

JP 2008-133459 A 2008.6.12

さらに、必要に応じて、チクソ性付与剤、酸化防止剤、紫外線吸収剤、顔料、消泡剤、難燃剤、接着付与剤などが使用できる。

チクソ性付与剤としては、微粒炭酸カルシウム、エアロジル（日本エアロジル社品）、脂肪族アミド、水添ひまし油などが挙げられる。

酸化防止剤としては、ブチルヒドロキシトルエン（BHT）、ブチルヒドロキシアニソール（BHA）、ジフェニルアミン、フェニレンジアミン、亜リン酸トリフェニルなどが挙げられる。

紫外線吸収剤としては、ヒンダードフェノール系、ベンゾトリアゾール系、ヒンダードアミン系などが挙げられる。

顔料には、無機顔料と有機顔料とがあり、無機顔料としては、二酸化チタン、酸化亜鉛、群青、ベンガラ、リトボン、酸化鉛、硫化カドミウム、酸化コバルト、酸化アルミニウムなどを用いることができる。有機顔料としては、アゾ顔料、銅フタロシアニン顔料などが挙げられる。

消泡剤としては、ポリシロキサン化合物などが挙げられる。

難燃剤としては、クロロアルキルホスヘート、ジメチル・メチルホスヘート、アンモニウムポリフォスフェート、ネオペンチルプロマイド・ポリエーテル、臭素化ポリエーテル、臭素・リン化合物を用いることができる。

接着付与剤としてはテルペン樹脂、フェノール樹脂、ロジン樹脂、キシレン樹脂を用いることができる。

#### 【0029】

本発明の一液湿気硬化性組成物は、後述の実施例に示されるように低粘度であるため、作業性が良好である。また接着後の剥離強度が高くて接着性に優れるとともに、硬化物における破断強度および伸びが良好である。しかも、広範な材料への接着用途に用いることが可能である。

被接着基材として、木材のほか、アルミニウム、鉄、銅などの金属材料；ポリアミド、ポリエチレンテレフタレート、ナイロン、ポリプロピレンなどの樹脂材料；コンクリート、アスファルト、石材など広範囲の材料に使用できる。これらの被接着基材のうちで、木材；アルミニウム；ポリアミド、ポリエチレンテレフタレートなどの樹脂が好ましく、特にアルミニウムとの接着性に優れている。

#### 【実施例】

#### 【0030】

以下、実施例を示して本発明を具体的に説明する。ただし、本発明は以下の実施例に限定されるものではない。

#### <使用原料>

以下の例で原料として用いたポリオールは、以下通りである。分子量は水酸基価換算分子量である。

・PPG-1000（略称）：開始剤としてプロピレングリコールを用い、KOH触媒を用いて製造した水酸基価112mg KOH/g、分子量1000のポリオキシプロピレンジオール。

・PPG-2000（略称）：開始剤としてプロピレングリコールを用い、KOH触媒を用いて製造した水酸基価56mg KOH/g、分子量2000のポリオキシプロピレンジオール。

・PBA（略称）：水酸基価56mg KOH/g、分子量2000のポリ（ブチレンジオール）アジペートジオール、日本ポリウレタン工業社製、商品名N-4010。

・IP/MPD（略称）：水酸基価56mg KOH/g、分子量2000、のポリ（3-メチルペンタレンジオール）イソフタレートジオール、クラレ社製、商品名P-2030。

#### 【0031】

#### 【製造例1：ポリエステルエーテルジオール（A1-1）の製造】

撹拌機および窒素導入管を備えた耐圧反応器内に、開始剤（a）としてポリエーテルポリオールであるPPG-1000の1000gを投入した。次いで、ポリカルボン酸無水